ワンピースをテンプレで生きて

楯樗

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルからお察し。我が拙作を読まなければ分からない番外編へよおこそ。

顔芸で一世を風靡してやまない神様に憑依して三姉妹助けた後、ワンピース二次小説のテンプレやっていった皇帝さまの毒電波を受信してしまった話。でもやっぱりおっぱい。

※注意！

・こんなのこの人じゃない！

・なんじゃとテメェ！　やっぱりＯＮＥＰＩＥＣＥ舐めてんのか、シバキまわしちゃる！

・おっぱいと可愛いは正義なんかじゃない！

・Ｑ．そんな適当理論で大丈夫か？　　Ａ．一番いい理論を頼む。

・いいからおっぱいだ！

・ワンピースをテンプレで生きる？　なぁにそれぇ？

という方、許せない方はご注意ください。

ツッコミどころ満載です。

目　次

最速にして最適 ―― 1
失われた白い町 ―― 5
悲劇は喜劇へ ―― 11

最速にして最適

「ちっ……胸糞の悪い」
ハンコックたちを助けられて気分が良かったのに、なんだこれ。
毒電波でも受信してしまったのだろうか。……ドラム王国のワポルに成り変わり、ボアの三姉妹と結婚して子どもを設けて、着々と国を作っている自分の姿。それに至るまでの過程と自らの思考と感情。自分の未来的な物が見えるようになっていて、追体験みたい。
思わず持っていた食器を落としてしまった。
「――そんなこと、させていいわけがない」
……それに、追い打ちかけるように近い将来フレバンスで世界政府主導の住民大量虐殺が起こると。そんな知識が新しく確認できるの。
世界政府という奴はやっぱりダメだね。腐ってやがる。
「シャッキーにニョン婆殿、フレバンスをご存知か？」
「……白い町ね。珀鉛製の食器が有名だったけど最近問題が発覚したらしいわ」
「うむ。じゃが、何故急にそニョ様な事を？」
怪訝な表情でこちらを見ていた二人に訪ねて確認する。
まだ、問題らしき問題は起こってないらしい。でも急がないと間に合わないかもしれない。
「こうして食を馳走になっている途中で悪いが、急用ができた。失礼する」
三姉妹に渡して無くなった3個を除いた計17個の悪魔の実を包んだ風呂敷を体に括り付け、目指すはドラム王国。
見え切った既定路線を進むのは些か気分が悪いが、ワポルの能力は捨てがたい。ドラム王国の国民には申し訳ないが、彼には表舞台、舞台裏どちらともから消えてもらおうかッ！
雷となって空を駆けた。

「だ、誰だ！　お前ｈ」
「ヤハハハ！　――黙れ」

痺れさせ、操り、加工し、取り憑き、丸ごと食べさせ、一切の面影を残さず肉体を人体の黄金比になるよう整形。
「しかし、面影は残さない方が良いか」
その辺に居た狼を喰った後、青髪は金髪と碧眼に変えて顎周りのブリキを取り除いた。持ってきた所持品も体内に仕舞っちゃうおじさん。
後は必要なさそうな『ロイヤルドラムクラウン7連散弾(ショット)ブリキング大砲(キャノン)』を取り入れて、危険な悪魔の実の一つであるネツネツの実を喰わせて。あと残り3つは取りあえず保留で。
まだ見えた未来で自分が使っていた『零抵抗(ゼロレジスト)・雷迎龍(ジャムブウル)』は出来そうにないが、まぁ、鍛錬あるのみか（使命感）
中二でも強いモノは強い（確信）
だけど、空島の黄金を船にする案は没だな。……でも回収はしとこう。

[ヨ]—[ヨ]—[ヨ]—[ヨ]

「あ……」
いつの間にか地に伏せ眠っていた自分が、目を覚まして玉座の間で見たモノは信じがたい光景だった。
「——この国の者だな？　この国の悪には、傲り高ぶる神に代わり我が鉄槌を下した。そう国民に伝え、安心させたまえ」
急すぎて何が何だか分からない。この男は何者だ。鍛えられた肉体美と整った顔立ち、それらのバランス。到底同じ男とは思えないが女性ではないということだけははっきりとわかる。この世のものではないとすら思うほどだ。
まるでどこか別の世界から来たかのような男に、暫し呆気にとられたが。
——だが、この部屋にあの者が居ないと言う事だけはわかった。
「ワポルさまは何処へ？」
あんな男でも守るべきものなのだ。亡き今も敬愛する先王に任さ

れたのだ。
「さあな。……生きているには生きているのではないかな。取り巻きの二人は一緒に居るだろうな」
　不敵な奴。自然体で、その身に纏うのは腰衣のようなものだけだというのに、一切の隙が見えない。
「質問は以上か？　無いなら、去らせてもらう」
「……名を、聞かせて貰おうか」

「エネル。悪政を取りやめさせたと英雄視するか、国王に仇なす者と見るか、其方の好きにするがいい。……ではな」

　そう名を告げて、瞬きをした瞬間男は部屋から消え去っていた。
　本当に今あの男が居たのかどうか。それすらも分からなくなる一瞬。
　後で確かにわかったことと言えば、チェスとクロマーリモも居なくなっていた、ということだけだった。

[Ξ]―[Ξ]―[Ξ]―[Ξ]

　一応の義理も果たしたし、あそこからどう変わっていくかは彼ら次第だ。後は知らん！
　王という面倒な立場に着くのは一度のみでいいし（辟易）
　空島のスカイピアへと空を駆ける。……到着後、高電磁力を発生させ黄金全てを引き寄せて余裕の回収。巨大豆蔓（ジャイアントジャック）の天頂にある鐘はそのままにしておいた。
　現神さまにバレてないよね？　よね？
　……と、思ってたらフラグだったよ。気づかれちゃったー♪（てへぺろ）
「何ッふぉおおおおおお――！」
（ドウモ、ガン・フォール＝サン。スゴクシツレイする）
　頭上から足に掛けて、微細な雷で駆け抜け、無かったことに。

ん、凄い絶叫聞こえたけど何かあったのかしらん。でもあと５０年は若々しくいられるんじゃないかな（すっとぼけ）

そのまま海上まで直行、視界の隅にも入らない故郷であるビルカにさよならバイバイ。

故郷のお父さんお母さん、エネルは元気でやってます。顔も覚えてないがね！（ゲス顔）

さて、ちょっくらおっぱいの素敵なシスターさん救いに行ってくるぜ！

失われた白い町

白い町。名をフレバンス。
――珀鉛という魔性に取り憑かれた、白い食器の上で踊る人々は今日も自らを犯していた。
その彼らの犠牲の代わりに得た料理を食すのは、欲望に塗れた悪魔たち。

「虫唾が走るな」
これだけでない。人の悪性を見るたびに、人という生き物がどれだけ私欲に塗れ、無自覚に他を傷つけているのかが理解できる。
残念ながら、このエネルの身体も人間だ。何処まで行っても欲は捨てれない。おっぱい。
「だが、己が志す至高を望むのであれば人は何処までも気高く在れる。だというのに……」
まったくもって嘆かわしい。天竜人と共依存の関係にある世界政府どもめ。一般人は愚か、常識ハズレなアウトローの連中から見ても激おこスティック（ｒｙものだってのに。
既に準備万端だ。何時でも行ける。
「汝らの罪も欲も。懺悔も夢も。絶望も希望も。――私が全て飲み乾そう。悔い改めろ」

……さて、誰も聞こえていない口上もそこそこに、粛清と浄化という名の完全犯罪を始めよう。

[Ξ]――[Ξ]――[Ξ]

「おいまだ昼だよな……？」
「いや、上を見ろぉッ！　何だアレぇッ!!!」
「いやぁあああああ！」
騒がしく、外に出てみれば皆が一様にして空を見上げていました。

中には急いで逃げ始める者も少なくありません。
空高く、其処に有るのは巨大な雲。このフレバンスの町だけを覆い隠すような、そんな巨大な雲でした。……雷鳴を轟かせているその雲は、まるで龍のようでした。
――実際に、雲には恐ろしげな口が見え、蜷局を巻く龍のように見えなくもなかったのです。
「嗚呼、神よ……!」
罰なのだと思いました。でも私たちが悪いことをしたのかどうかは……いえ、しているのでしょう。美しく、富をもたらす珀鉛を我が物としていたのですから。
ゆっくりと、じっくりとその龍の口は開かれ、フレバンスの国をすっぽりと覆う大きさまで開かれた後、龍は国へ、町に降りてきました。
突如として前触れもなく現れた天災であり災厄――……神罰でしょうか。
あの口の奥は大嵐であり、それが徐々に落ちてきている。
逃げ惑う人たちの中には腰を抜かし、その場から動けなくなっている者も少なくなく。誰もが己らが何をしたのか、今まで犯した罪を数えていました。
「シスタぁあああ!」
「うえええええ……!」
子ども達だけでも。どうか、この子たちだけでも。教会の中へと連れて入り、少しでも無事であれば。
……人間最後は神頼みと言う事でしょうか。訪れたこともない人も、いつの間にか教会の中へと来ていました。狂乱に塗れ、暴れない者が居ただけまだ良かった。
駆け寄ってくる子供たちを……そして自分自身を安心させるように抱き寄せて、私の意識は途絶えました。
「……此処は」
そうして目覚めた私が居たのは教会。子供たちもすぐ横で寝てい

ます。……生きているのだと実感するのには時間がかかりました。
外に出てみると町は灰色の一色。
……いえ、これも一切の珀鉛も取り去られた町並であるということに時間がかかっただけ。これが本来の町なのだろうと思いました。
やはり、珀鉛は人が扱うには過ぎた物であったのかもしれません。
そして神がそれを戒めに来たのだと。私にはわかりました。
灰色の町は、白という輝かしい色になれてしまっていたせいか違和感がありましたが、身体はスッと透くような気分でした。活力にあふれ、今にも踊りだしそうで仕方がなかった……。
目を覚ました人たちから、一様に変わり果てた町の姿に驚いていましたが……実際にどうかはわかりませんが、晴れ晴れとした表情をしていました。
全てが終わり、今に知ったことですが町だけでなく採掘所からも、どれだけ掘っても塵一つとして珀鉛が出てこなかったそうです。誰もが首を傾げ、もうフレバンスは繁栄しないと嘆いていました。
ですが、人々は陰ながら「珀鉛は神の遺物であったのだ」「禁忌に触れた」と畏れを抱き、懺悔しにくる方も多く。……実際に私もそうなのだと思っています。

――もうアレに触れてはならない。今度は嵐を纏った雲の龍だけでない。
そう誰もが恐れている。今度は無慈悲に我らを喰い滅ぼすのだと。
でも後に私たちは知ることになりました。――あれは神の慈愛であったのだと。

『珀鉛には毒があった。』

それも性質の悪い、発見の難しい毒だと。しかし国民全員が検査を受け、誰一人中毒症状が見受けられない。これは神の奇跡だと世界中から持て囃されました。
皆が悟りました。やはり神の優しさ故の事であったと。あの龍は

我々を浄化する御使いであったのだと。奇跡を起こされたのだと。
幸いにも各地への賠償金は国民全員の金銭で補えたので金銭面の問題はすぐ解決できました。
しかし、その後すぐに、珀鉛の産業が始まる以前――百年前から、その毒性を世界政府は知っていたという噂が流れはじめました。
それを隠そうとする記事を発行する世界政府の信用は一気に落ち、幾つかの国から賠償金の返金があったそうです。また、フレバンス上層部関係者によると、援助金という名の別な目的が伺えるお金を世界政府から貰った、とのことです。
そんな話も町には流れ、いよいよ国民は国のことを信じられなくなり、神への信仰を口にする者が今日も多く私の詰める教会へやってきます。
白い町ではなく、神の町と呼ばれるようになるほどですから。

――彼の御方が慈悲深く、慈愛に満ちた御方である、というのは私が一番よく知っています。
あの時。気絶していたあの時。意識も無かった私ですが、体が覚えているのです。
誰かに抱かれている安らぎ。優しい腕に抱かれた感覚。
神の抱擁であったのだろうという確信が私にはあります。嗚呼、後ろから抱かれるあの感覚。思い出しただけで――はしたなくも疼いてしまう。
「あ……う……」
あれからというもの、偶にですが神の抱擁を感じる夜がある。眠りながらその温かさと心地よさに身を任せて、至福を感じてしまう。
私だけ、私だけが神の愛を感じることが出来る。狂いそうなこの感情を何処へしまっておけばよいのか、私にはわかりません。
神よ。どうか、罪深い私へ罰をお与えください。
……神聖な貴方さまへの信仰を行う場所で、自らを慰める私に罰をお与えください……。
嗚呼……神よ……。

[ヨ]―[ヨ]―[ヨ]―[ヨ]

フレバンスの国丸ごとをバクバクした。まだまだ『零抵抗・雷迎龍（ゼロレジスト・ジャムブウル）』の制御が難しくてかなわん。バクバクするのに一時間かかった。

国丸ごとって言っても珀鉛そのものと住民の身体に溜まった毒だけだし、食べる量は少なくて済んだんだけども。

……ご褒美に、眠っているシスターさん抱きしめて帰らせてもらったのは許してほしいところ。柔らかくて、ほわほわで、良い匂いして、ちょっと言葉に出すのが躊躇われるくらい良い具合でした（てへぺろ）

実はこの身体では初めての女体の感触。ちょっと定期的に抱かせてもらおう。不思議と自動変換さんに邪魔されないし。

にしても中二モード全開でしたね（後悔）

もう嫌。自動変換だけでなく、自分の意識的な物もあっちのエネルに毒されちゃってる。

らめぇらめなのー、と本気で言いたいけどキャラ崩壊になるようなことは言えないんだふざけんな。

だからと言って海軍に入ったときの彼になるのは不味い、という先人の知恵。ギルガくんは、もういないっ！

さて、珀鉛は凝縮して海の底へ……沈めたらだめか。公害だっつーの。

ええ、亜空間とはいえ持っとくの嫌なんだけど。

んじゃ電磁加速投射で宇宙の塵にしとこう。軽く島一個分くらいあるけどそれくらい軽い軽い。

「良し、片付いた」

……うん、よく飛んだ。

幾らゴミが集まってるからって、不法投棄は良くないからね。シカ

タナイネ（舌打ち）

悲劇は喜劇へ

フレバンスの情勢を安定させつつ、その見返りに夜中こっそり忍び込んで敬虔なシスターさんを不定期的に抱きしめさせていただき。……そんなこんなと、色々と工作している内に3年程経った。

知識と照らし合わせてみるに、大体原作が始まるまであと15年。

フレバンス関連で早急に終わらすべきことも終わらしたし、少し余裕が出来たので各地に映像電伝虫を置いていこう。

……あれ、何処で買えるんだ？

ま、まぁ？　市販されてるって知ってたけど？　……態々お金払わなくても野生のを捕まえれるなら捕まえて使った方が良い。

節約は大事（戒め）

……実はスカイピアの黄金は柔らかく硬い物質の材料に使って、一本の槍にしてしまったからもうないなんて言えない。

まぁ稼ごうと思ったら稼げるけど稀少金属類を売れば値崩れするし、賞金首を狩っても「やらないか」と海軍のいい男たちから執拗に言われかねないので嫌なのれす（小人風）

そうこうしていると電伝虫の群生地っぽいのを発見。さて、バクバクしちゃおーねー。

バクバクしていると捕食されてるとでも勘違いされたのか、見たことない速さで逃げていくので、全部捕まえるのが大変だった。

電伝虫たちの電波の周波数を統一して、専用回線を造って、今までバクバクしてきた物と合成。これでカモフラージュも完成したので、東の海から主要な場所に設置しに行こう。

それに長鼻君の母上が病に臥せっているらしいので、辻ヒールよろしく治してくるとしようか。

[Ξ]—[Ξ]—[Ξ]—[Ξ]

「……あれ？」
目が覚めたと思ったら、急に楽になっていた。
何が起きたのか分からないが、身体が軽い。腕も、脚も動くし、こうして起き上がれる。視界もぼやけていない。
「母ちゃんただいま――ちょっと、だめじゃん体起こしたら！」
「あ、お帰りウソップ。……なんだか母さん身体が凄く軽くなったわ。治ったのかも」
「そんな！　じっとしてないとダメだって！」
心配性な息子だ。自分の身体の事は自分が一番分かっているというのに。
「……信用してないならウソップ！　お医者さん行って確かめてもらいましょ！」
「医者呼ぶからッ！　呼んでくるからジッとしてぇッ！」
久々にウソップと大声を出した気がする。
……怒っているようだが、息子の声はなんだかとても嬉しそうなものだった。

[Ξ]―[Ξ]―[Ξ]―[Ξ]

仲睦まじくじゃれ合うウソップとバンキーナの姿がそこにはあった……！（涙目）
辻ヒールの甲斐があったな。ウソップが初めて嘘を吐くという名シーンらしいものがあるらしいが、そんなもん知らん。
「治る病気で死ぬ方が不愉快極まりないというのに」
悲劇的な感動のシーンに涙するか、喜劇的にも死ななかったことに喜ぶかは人それぞれだものね。
身体の悪いところ全部除去して補完してきたから、下手な医療行為よりも元気になっていることだろう。
骨格もずれていたようだったからそれも治してきた。明日からも子供と二人、健やかに暮らせれば治した側としては万々歳だ。

お屋敷に一つ映像電伝虫の子を一つ設置して、ゲッコー諸島のシロップ村から立ち去る。
シモツキ村一心道場の物置小屋、コノミ諸島の主要施設の各所、フーシャ村や不確かな物の終着駅（グレイ・ターミナル）など、視界が開けて目につくところ全てに設置。
グレイターミナルには夜中もう一度来よう。掘り出し物を回収しとかないと（使命感）

南の海、西の海、北の海、偉大なる航路（グランドライン）と巡って電伝虫をその各島々、土地の環境に適応カモフラージュさせて置いてきた。
皇帝になった自分は此処まで徹底的にはやらなかったけど、もしかしなくとも自分への負担は大きいな。
うげ。そうこうしているうちに各地で内乱、戦争、襲撃、天災が起こっている。それが親電伝虫の視界から見える。やるとしてもせめて目に余ることぐらいかな。嫁姑問題は勝手にしてくださいおねがいします。
それでも色々と目に余ること多いけど……全て現地点であちらのエネルが防げなかったことだ。……暢気に船作ったり寝たりしやがって、まあ。
「チッ……違う自分とは言え腹立たしい」
これって自分だから余計に腹がたつのかも。
……後で新聞記事を読んで後悔していたみたいだけどさ。それに2、3年ずっと試行錯誤と成形すればそれくらいねむりたくもなる。
まあ見てられないっていうのは自分としてもそうだし本能の赴くまま、やろうか。

東の小島に大嵐があれば、これを気圧の変化で消してやり。
西に国同士の戦争があれば、『零抵抗・雷迎龍（ゼロレジスト・ジャムフウル）』で武器になりえるモノ、能力者の能力、原因全てを喰らいつくし。
南に人さらいをやらんとす輩があれば、これをバクバクして。
北に無礼といいつつ一般人を殺めようとする天竜人があれば、これ

を掃除し。
偉大なる航路に海軍とは名ばかりの下衆があれば、これをボランティア精神の溢れた紳士に作り替え。
日照りが１０日続いているようであれば雨を降らせ。
夏でもまだ寒い冬島の気温を上げる。

「そういう者に私はなりたい」
もうなってるのは秘密。
日射しが強いからと厚着してた女性の方々が急にずぶ濡れになりました、眼福でした。ボディのラインがキュッとして、ボンとしておっぱい。
……嗚呼、良き哉。
「得るものは多かったな……」
まぁ、我ながら一日でよくやったものだと思う。
幾らワンピース（おっぱい）を見られたからといっても流石に私、疲れます！
あ、気が付いたら夜中だわ。不確かな物の終着駅（グレイ・ターミナル）バクバクしてこよ。

モミモミの実、見つけました（戒め）